

E. M. フォースターの思想形成

——クラップム派の再評価——

福 田 二 郎

小説家としての E. M. フォースター(1879-1970)が最後に出版した作品は、彼の代表作である *A Passage to India* (1924)である。その高い評価を考えれば、次なる大作を待ち望む読者にとっては45歳という若さのうちの断筆であった。その後91歳まで生きた彼の人生の後半は、主に評論活動に捧げられる。彼が生きている間に出版された最後の著作は、『マリアン・ソーントン：ある家族の伝記』(1956)という大伯母の伝記だ。

フォースターには、ナイチンゲールやヴィクトリア女王などの伝記作家として名高いリットン・ストレイチーという友人がいる。しかしフォースターは、歴史上ほぼ無名といってよい身内の人間の伝記を書いた。それは一般的に伝記というものを書くという動機、すなわちひとつの時代の著名人、社会の変革に大きな影響を及ぼした象徴的人物を取り上げることにより、その背後にある大きな歴史の動きを記録しようというものではなかろう。また無名であっても、突出した性格や素養を持っており、その人生をたどることは、読者にとって未知で興味深い人間考察を提示するというものでもない。

マリアン・ソーントンは、あまりにもありふれた凡人なのである。英国の上流階級に生まれて大きな屋敷に住み、結婚を逃したが多くの家族に囲まれ、老齢まで一族の中心的人物として主に家の中だけで生涯を終えた女性の一生。それはひとつの典型的な英国的特徴を描いている。それはマリアンでなくてもよいのだろう。それは古き良きヴィクトリア朝時代の終焉を記念するといってもよいものだろう。「古き良き」というのはフォースターにとってである。彼が77歳という年齢で、幼い頃のわずかな記憶を掘り起こし、一族の遺産として残る様々な資料を丹念に整理しようと思いついたのは、家系の歴史に強いこだわりを持つ英国人氣質とともに、失われつつある彼の子供時代に対する郷愁の念であろう。さらに、フォースターが人生の締めくくりに近づいた年齢に近づき、彼の文人としてのアイデンティティ、ヒューマニストとしての立脚点を再確認したかったのではないかと思われる。

マリアンの伝記は、彼女の命ともいえる家、バタシー・ライズ、そしてその土地、

ロンドン南西の郊外にあるクラップムの由来から始まる。フォースターの代表作のひとつである『ハワーズ・エンド』が、そのタイトルを作品中の家の名前からとり、その家が作品中の精神的象徴として重要な意味を持っていたように、バタシー・ライズという家はフォースターの属する家系一族にとって、物理的にも精神的にも象徴的な中心地であった。その歴史の始まりは、マリアンの曾祖父ロバートが1735年に当地に移り住んだことにさかのぼる。彼はイングランド銀行の頭取で、ロシア貿易で財をなした商人であった。その息子、マリアンの祖父ジョンも同銀行の頭取となり、父ヘンリー（1760-1815）もまたそのあとを継いでいる。つまり代々成功した商人の家系というわけである。

フォースターは1939年、60歳のときに「ニューステイツマン・アンド・ネイション」という週刊誌に「ヘンリー・ソーントン」という、彼の曾祖父、そして彼の生きた時代を紹介するエッセイを書いている。彼に言わせると、一族の長であったヘンリーは、「単なる成功した銀行家、大々的な慈善事業家、敬虔なクリスチャン、愛情あふれる夫、思慮分別のある父親、誠実な友、正直な市民、腐敗などありえない代議士」という、お手本にでもなるような人物であつたらしい。しかしこれほど立派な御先祖様であるにもかかわらず、フォースターは「単なる」というやや否定的な形容詞をつけている。

続けてフォースターは、ヘンリーの遺した祈禱書を紹介する。これは1834年から20年あまりの間だけで31版を重ねた、隠れたベストセラーである。驚くことに、3世代を経たフォースターの生まれた時代でも印税が入っていたらしい。それはヘンリーがバタシー・ライズで朝晩食事の前に、家族に向かって読みあげた個人的なお祈りの書である。この内容について、フォースターは「なぜこのようなものが19世紀半ばに、真の福音主義の卓越したしるしとなりえたのか理解に苦しむ」と言っている²。彼はそこにヴィクトリア朝末期の、今や消え去った古き良き時代の雰囲気、贅沢に暮らす人々が厳かに跪いている姿を想像させる以外に意味はないと言いきっているのである。ここでそのお祈りの内容を考察してみよう。

34もの寝室があり、数多くの使用人が働くバタシー・ライズ。ソーントン一家全員が食卓に集まり、皆が静まったところで一族の長、ヘンリーが厳かに祈りの言葉を読み上げる。「全能なる永遠に神聖なる神よ」で始まり、「いと高き天の」、「不死なる」、「偉大なる」、「祝福された」などといった賛美の単語の繰り返しである。そして一方で「我々」は「迷い」や「間違った道」に陥りやすく、ひたすら謙虚に「善なる神」に救いと導きを願う。似たような決まり文句の繰り返し。これを毎日聞か

される家族や使用人たちはうんざりしていたか思考を停止していたか、しかしこれがベストセラーになるほど需要があったということは、たしかに19世紀の英国上流階級の生活の雰囲気を知る歴史的資料とはなるだろう。

現代の読者であれば、当然繰り返される神の賛美以外のところに注目するだろう。例えば時に海外の状況にも言及がなされる。

外国の地に、はりつけになったあがないの知識を広めようと努める者に、特別な天恩を授けたまえ。彼らが偶像崇拜や迷信に対してよく闘うことが出来るよう、その摂理と恩寵によって助けたまえ³。

西欧諸国から見た、西欧以外の地域に対する極度に単純化された認識、それに付随する蔑視、そしてそこから導き出される帝国主義による植民地政策の正当化を、20世紀になってパレスチナ出身の文学者サイードは、その著作『オリエンタリズム』によって厳しく指摘した。それを参照するまでもなく、このヘンリーの思考方法には絶対的なキリスト教中心主義、そしてそれ以外の文明、宗教は間違いであり、正すべきであるという傲慢さが見てとれる。ここで忘れてはならないことは、ソーントン一族は代々大手銀行の経営に携わり、さらに海外事業への投資によって莫大な財をなしているということだ。18世紀から19世紀にかけての英国金融業は、植民地政策による商業活動の上に成り立っていたといってもよい。「合法的な」事実上の略奪と搾取の裏には、このようなキリスト教中心主義による正当化があったことを忘れてはならないだろう。

しかしヘンリー本人はひたすら「謙虚さ」を求め、「傲慢さから逃れられるように」と祈り続けるのである。

我々が謙虚さをまとうことが出来ますように。すべての良俗に反するもの、世俗的な欲望を否定し、我々がこの現世において、落ちついて良く正しく生活することが出来ますように。それぞれが適切な義務を果たし、よくとられがちになる怒り、悪意、憎しみ、嫉妬、そしてその他すべての悪しき性質に十分注意を向けながら、我々は持っているものだけで満足出来ますように⁴。

金融業によって莫大な財産を築き、多くの使用人がいる大邸宅で豊かに暮らす人々が、毎日このような謙虚さと節制を説いているのである。繰り返し「貧しい人

びとに目を向けるように」と自戒しているのである。「それぞれが適切な義務を果たし」というのは、「子供は親に従順であり」、「妻は夫に尽くして家を取りしきり」、「使用人は正直に働き」、ヘンリー本人は「できるだけ稼ぐ」ことになる。「大金持ちになること」と、「現世の欲望を打ち消し、節制を守ること」を両立させるのは難しそうだ。キリストも、「金持ちが天国に入るのは難しい。金持ちが神の国に入るより、ラクダが針の穴を通るほうがもっとやさしいことだ」と言っているのではないか。

この撞着する問題を説明するのに、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904~5)を参照しよう。ドイツの社会学者ヴェーバーは、米国や英国など、プロテスタントの中でも特にカルヴィニズムの流れを汲む国では資本主義の発達が顕著で、カトリックの国々や、プロテスタントのなかでもルター派の流れを汲む国ではその発達が遅かったことに注目し、そこには因果関係があると考えた。

一般的に、カトリック信徒が教会で懺悔し、赦免を受けて罪の決済をするというような構図を、教会の権威を批判するプロテスタントであるカルヴァン派は特に否定し、日常生活全般のなかでの禁欲と節制を内面化しようとした。つまりあらゆるキリスト教信者が修道士のような生活を送ることを理想とするようになったのだ。そしてプロテスタント特有の教義、世俗的な日常の労働における義務の遂行のなかに、宗教的意義を認める思想が生まれる。各人が各々の持ち場で精一杯働くことが、神の栄光を増すことになるのだ⁵。

「職業」を意味するドイツ語の“Beruf”，英語の“calling”という単語には、「神から与えられた使命」という意味がこめられている。このような表現は、カトリックが優勢な諸民族には見られず、プロテスタントの優勢な諸民族には必ず存在すること、そしてその違いは聖書の翻訳者の精神に由来しているということをヴェーバーは指摘している⁶。そしてプロテスタントのなかでも、特にカルヴァン派から発生した英国のピューリタニズムが、この「天職理念」のもっとも首尾一貫した基礎づけを示していると考察している⁷。再びヘンリーの祈禱書を引用しよう。

神は我々それぞれに生活のなかでの仕事を定めた。おお神よ、我々がそれぞれの義務を勤勉に果たすことができるようにさせたまえ。願わくば我々が無益に、怠惰に時間を無駄にすることがないように。また我々に委ねられた信用に対して不誠実なことがなからんことを。そしてつまらない善の装いなどをまとうことのないよう。そして周りのあらゆる人々を騙そうとなど少しも考えないよう。

そして神の目が我々を常に見ているということを覚えておきますよう。…⁸

実はこの文と段落はまだまだ続くのであるが、ヴェーバーの指摘する英国ピューリタニズムの特徴を指摘するには十分だろう。このようにヘンリーは日常生活のなかで（食事ごとに）不断の反省、節制、それぞれの持ち場での努力を唱え続ける。しかし英国国教会の司祭で、欧米を中心に大きな勢力となるメソジスト派の開祖であるジョン・ウェズリーが懸念するように、ひたすら勤勉で質素・節制を重んじていけば、当然金持ちになってしまう。すると豊さを謳歌し、現世への執着心も強くなりがちだ。それは望ましいことではない。そこをどうやって理屈をつけるかが問題だ。

富の獲得は、合法的な経済活動のなかの職業である限り、それは推奨されるどころか宗教上求められる義務であると考えられた。「カトリシズムでは条件つきで許容されえたことがら、プロテスタンティズムでは積極的に道徳的に善いこととなった」のである⁹。問題になるのは、富を築くこと自体を目的にしないこと（つまり金儲け自体を目的にし、ということ）。そして富が物質的欲求を満たす手段となってしまうこと（貨幣を消費の手段としてはいけないのです）、そしてさらに稼ぐことを休んでしまったり、怠惰や安逸な生活にふけてしまうことだ。金がたまったら贅沢をしたいとか、早く優雅な隠居生活をしたい、というのはもってのほかなのである。神の目はいつでも見ているのだ。

宗教的情熱に支えられて、休むことなく稼ぎ続けて節制をし、金持ちになった信者に対してウェズリーは、「天国に宝を積むために、できる限り他者に与えねばならぬ」と勧告する¹⁰。ヘンリーのお祈りも、この教えに忠実に沿って唱えられる。

我々に自制する勇気を与えたまえ。そして他者に親切で寛大である心を与えたまえ。いつでも受け取るよりも与えるほうが素晴らしいことであると心にとめながら。… 我々は富、名声、尊敬、豊かさを求めはしない。ただ静かで、平和な心を、聖なる生活をおくる機会だけを祈るのみです¹¹。

というわけで、ヘンリーは金融業で熱心に働くと同時に、片時も休むことなく慈善事業に精を出した。当時クラップム・コモンには裕福な福音派の人々や、志を同じくする高潔な代議士たちが集まり始めており、それはクラップム派と呼ばれるようになった。そのなかのひとりが、ひとつ年上のいとこである代議士のウィリアム・

ウィルバーフォース (1759-1833) である。ヘンリーとウィルバーフォースは気が合った友人というよりは、ほとんど神の名のもとに結ばれた同士である。

二人が中心になって手がけたクラップム派の慈善事業には、教育関係では「日曜学校協会」ほかに子供のための数々の慈善学校、宗教にかかわるものとして「ロンドン伝道者協会」「宗教パンフレット協会」「若者宗教教育促進協会」「英国内外聖書協会」、社会的な使命感を帯びたものとして「貧しく障害を持つ子供たちのための施設」「孤児の少女のための避難所」「貧乏人の生活環境を改善し慰安を増加させる協会」「産業関係労働者慰安協会」「英国軍人・水夫の孤児のための協会」「非行防止協会」「貧乏・虚弱・年老いた未亡人・性格の良いひとり者・かつては裕福だった人たちなどの慰めとなる女性共済会」「煙突掃除少年の仕事をなくす協会」、また海外では「アイルランド慈善学校」「アフリカ教育協会」「西インド諸島の黒人への伝道協会」などがある。まだまだあるのだが、とにかく常に「弱者はいないか」と目を光らせ、目に止まるやいなや救済の手を差し伸べるといふ、休むことのない人生であった。なかでももっとも歴史に残る有名な活動が、奴隷解放運動である。

ヘンリーとウィルバーフォースを中心とするクラップム派は、奴隷制度に対して、強い反対を受けながらも宗教的信念から粘り強い活動を続け、20年にも及ぶ苦勞の末、ついに1807年に奴隷貿易を違法とする法律を制定させた。この世界に先駆ける快挙は、「黒人と白人が平等に共に仲良く暮らすことのできる地」を作ろうとする理念を持ったものであった¹²。これは一般的な国益に反することだけに、「良心の勝利」とも言えるものであろう。この法案が通った後、ウィルバーフォースは「さてヘンリー、次は何を廃止させてやろうか？」と尋ね、ヘンリーは「宝くじがいいと思うよ」と答えたそうである¹³。なるほど彼らの宗教的信念には、一攫千金を夢みる宝くじは許し難いものであったろう。

ここまでヘンリーを中心とするクラップム派の活動を見てきたが、ここでフォースターがそれをどのように見ていたかを考察しよう。

クラップムの人々は（ヘンリーの祈禱を）聞き、跪くのを終えると食事をし、それからできるだけ沢山稼いだのである。そしてまたできるだけを施した。どちらにしても大変な額だった。当時の経済状況のおかげで、富はこういった立派な人々に朝から晩まで流れ込んできており、心理学者でもなかった彼らは、すぐさま使って身を清めてしまえば、多額の金は彼らの魂に何の影響もない、と考えていたのである¹⁴。

身内に対して、辛辣な批評である。この「ヘンリー・ソントン」というエッセイを発表する4年前にも、フォースターは「バタシー・ライズ」というエッセイを雑誌に投稿している。そこでもクラップム派の特性を、「富、福音派の信仰心、純粹な善、偏狭さ、自己満足、誠実さ、あら探しをしたがる性質、党派性、気高い公共心、こういったものがお互いに調和を乱すことなく、その広い胸のなかに生き生きとしていたのだ」と評している¹⁵。どれだけ慈善事業に精を出しても、その一族はみな大変裕福であったし、フォースター自身もいくらかはその財産を受け継いでいるということを彼は認識しているのである。その上で、フォースターは「見えざる存在に対する無関心が、曾祖父の一派の大きな欠点であったように思える」と指摘する¹⁶。

奴隷制度が産業労働者のことである場合には、彼らは何もしなかったし、何かしようなど考えもしなかった。彼らはそれを何か「自然なもの」と見なしており、それに遭遇することは、ものを学ぶ経験になるくらいのことか、独善的に自分たちの境遇をありがたいことだと思いう機会になるくらいだった¹⁷。

なるほど「信仰、勤勉、節制」がすべてとあってよいクラップム派の人々にとって、労働者たちは憐みの対象にはなっても、決して対等の権利を持つ人間とは思ってもよらなかったのである。また当時英国の資本主義経済の発展（＝植民地を土台にした帝国主義の繁栄）は凄まじい勢いの成長を示しており、骨の髄から保守的な彼らは、例えば労働者に対する「団結禁止法」を支持しているし、ヴィクトリア朝の階級社会は永遠に続くものと考えていたに違いない。資本主義および帝国主義のひずみが顕著になり、マルキシズムの登場を待つまでにはまだしばらくの時間があったのである。

フォースターは、このようなクラップム派の限界に対する批判には同意するが、時にそのような批判に伴う道徳的憤りは共有しない、と言う。商業主義が勢いを増して広がる世界で、手段を選ばずに蓄財に専念する者、合法であれば問題ないと金儲けに熱心になる者たちが圧倒的多数であるなか、彼らは常に「善なるもの」を意識しながら生きていたからである。確かにクラップム派が活躍した時代から、人類は社会主義、共産主義、全体主義、資本主義に民主主義など、様々な社会制度を考え試し、200年の月日が過ぎた現代でさえも、慈善事業、富の分配、生産手段・経

済活動の公平化など、制度的・道徳的に、どれだけの改善がなされたものだろうか。

次にクラップム派の女性たちを見てみよう。休むことのない精力的な人生を送ったヘンリーは50歳の若さで病死し、その妻も後を追うように同年に他界した。バタシー・ライズには、当時18歳の長女マリアンと15歳の長男ヘンリーを筆頭に（長男・長女はそれぞれ両親と同じ名前なのでまぎらわしい）、9人の子供たちが残された。クラップム派の親しい友人たち、多くの親戚と十分な財産はあったが、子供たちは当然後見人を必要として様々な人々の世話にならねばならなかった。長女のマリアンにとって、精神的支えとなったのは父の同士であるウィルバーフォース、そして彼女の名付け親で、クラップム派と志を同じくする活動家、ハナ・モアであった。

この女性についても、フォースターは「ミセス・ハナ・モア」というエッセイを書いている。ハナは5人姉妹の4番目で、姉妹揃って戦闘的でよくしゃべり、奴隷貿易に反対で、貧しい人びとを向上させようとした。彼女もクラップム派と同じように、常に不幸な環境にある人々に目を向け、慈善事業に熱心だったのである。

彼女が貧しい人びとと交わりたいという願いは、心からの憐れみと愛情が入り混じっていた。そしてある意味で、貧しい人びとに敬意を持って近づこうとする人々よりも近づくことができたのである。彼女の生徒たちが農民の息子でない限り、彼女は書くことを許さなかった。そして歴史や科学を学ぶべきだ、などという提案を受けようものなら、ぞっとするほどの反感を持った。また逆に子供たちから何かを学ぶ、などという考えなど聞こうものなら、彼女の精神にはフランス革命でも起こったようになってしまったことだろう。それにもかかわらず、彼女は「この世で私が何か少しでも知っているとすれば、それは貧しい人たちのことなのです」と言ったのだ¹⁸。

もちろんこのような考え方に、人は度し難い高慢な姿勢、根っからの貴族意識を見るかもしれない。フォースターは後に引き剥がされるその偽善性を認識しながらも、「彼女は田舎で、姉妹に囲まれてショックを受けたり、忙しくしていたほうが彼女らしい」と好意を持っているのである¹⁹。

若くしてソーントン家の長とならねばならなかった長女マリアンも、クラップム派の精神を引き継いだ。彼女も父ヘンリーと同じように、カルヴァンの流れを汲む福音派の教義を当然のこととし、儀式だとか他の宗派のことなど頭になかったらしい。そして家庭内ではオースティンの小説のように、一族の縁組や財産の問題など

に頭を悩ませていた。そして対外的には慈善事業，特に教育事業に熱心であった。その動機について，フォースターは伝記のなかで二つを挙げている。

一番真っ先にくるのが，無知への嫌悪，そして18世紀的な理性への信仰であった。子供たちは，知識が増えるほど，より幸せで，より健康的に，そしてより役に立つようになるだろう。「より多くを知る」ということは，「人生から最良のものを得ること」という意味においてだった。ふたつ目の動機になるが，子供たちは身分に応じた教育を受けるべきということだ。ハナ・モアのように，彼女は現存の社会組織は満足すべきもので，これからも続くだろうと思っていた。彼女の属する階級には召使いや住み込みの女家庭教師が必要だったので，彼女は良質なそういった人材を教育が輩出できるか気になっていたのである²⁰。

フォースターは，この指摘のあとで，個人的には「第一の動機のほうを強調したい」と述べている。たしかに善意の一般市民の，特に裕福な人間の保守的な考え方の特徴を指摘はしても，感情的な批判をしてもしかたのないことだろう。現在の日本の教育制度を鑑みても，「実用」だの「実践」が重視され，「格差」が広がる社会制度の根本的問題を考察することよりも，現存の商業システムのなかの「有能な働き手」の養成が叫ばれているではないか。

ここまでフォースターがクラッパム派をどのように評価したのかを見てきたが，ここで「英国民の特性」というエッセイを取り上げ，フォースターによる英国の国民的気質についての考察を追ってみよう。

英国民の特質は，本質的に中産階級的である。… 堅実で用心深く，清廉で能率的。想像力の欠如。偽善性²¹。

このくだりを読めば，フォースターが見たクラッパム派の特質は，その多くの部分が英国民の特質と重なるといことがわかるだろう。彼は英国民の本質が中産階級にあるならば，その中産階級の本質にあるものは，義務的な集団行動，礼儀と団体精神を重視するパブリックスクール・システムだという。

次の考察は，これまで繰り返し引用されてきたくだりである。

(均質化されたパブリック・スクールの卒業生たちは) この世界へ，まったく

パブリック・スクールの卒業生でないどころか、アングロ・サクソンでさえもない、浜辺の砂ぐらいに多種多様な人々で満ち溢れた、彼らには考えも及ばない豊さと精妙さを持ったこの世界に出てゆくのだ。彼らはよく発達した肉体、素晴らしく発達した知性、そして未発達的心を持って出てゆくのだ。そしてこの未発達的心が、英国国民が海外でやっかいごとを起こす大きな原因になっているのである。未発達な心ということで、冷たいのではない²²。

この「未発達的心」こそ、冷たくはないが想像力に乏しいという、クラップム派の思考の限界につながることは言うまでもないだろう。それがフォースターの厳しい結論を導く。「常にわれわれ英国国民が受ける第一の告発は偽善性だ。… 聖書を片手、ピストルを片手、両のポケットには経済的利権がたんまりの帝国を築いた国民なのだ」²³。

続けてフォースターは英国国民の宗教感覚について考察する。

正しい行いというのが英国国民の目的なのだ。宗教には、日常生活において良き人間にしてくれることを求める。より親切に、より正しく、より慈悲深く、悪しきものに闘いを挑み、良きものを守れるようにと。誰もこれを低級な考え方だと言えはしないだろう。これもまあ、精神的なものだ。しかし、これは一国民の典型的な性質だと思うのだが一宗教的概念の半分でしかない。宗教というもの、神によって認められた道徳律だけではない。それはまた、神聖なるものに直接関わるための手段でもあるだろう²⁴。

マックス・ヴェーバーが指摘したように、カルヴァンの流れを組む英国人の宗教に対する姿勢は世俗的な日常生活の重視であり、非現世的なカトリシズムと、その意味で対照的である。フォースターはクラップム派の宗教的慈善行為を評価しながらも、それが「冷たさ」ではなく「未発達」ゆえの限界を持つのは、上記のように欠けている部分があるのだ、と考えるのである。

ここまでフォースターの、父方の家系であるクラップム派に対する考察—それは英国国民の特質を代表するものであるが—を見てきたが、その総括的な評価の言葉を拾い上げてみると、フォースターが志向したひとつの展望が見えてくる。

(クラップム派については) 二つの点が顕著である。ひとつはその一様性だ。

マコーレー家を除いて、そのメンバー全員が裕福で、また全員が例外なく慈善事業に熱心で、芸術的というよりは知的であった²⁵。

つまりクラップム派の人々に欠けている点は、「芸術性」ということになる。フォースターは他のエッセイでも、ヘンリー・ソートンにとっては「詩、神秘、熱情、恍惚感、音楽などは問題にならなかった」²⁶と指摘し、またバタシー・ライズの人々は「芸術的感覚がなかったことは言うまでもなく、文学にも、知的なもので人格形成に役立つもの以外は関心がなかった」²⁷と繰り返し述べている。ではその「芸術的感性」というものがどのように必要とされるのだろうか。

フォースターは「我々の時代の難題」というエッセイで、「自分はヴィクトリア朝的自由主義の末端に属する人間だ」とし、その古き良き時代の教育は自分を穏和に育て、それで良かったと言っている。しかしその教育は人道的ではあっても、自分たちの経済的立場を理解させるには不十分であったと認めている。そして「我々の時代の難題にうまく答えるには、この新しい経済と古い道徳をなんとか結びつけないといけない」という²⁸。

ここでフォースターは「創造にたずさわる芸術家（作家）としての見解」と前置きをしつつ、新しい経済世界のなかで、しばしば軽蔑される芸術というものにも、活動する余地があるのではないかという。

（作家・芸術家は）簡単に言えば、自分の望むことを言えばいいのであり、計画を立てる権威筋によって言わされるべきではない。外から言われたことを受け入れるのではなく、自分に課した規律を置くべきである。そしてその規律は、社会的だとか道徳的なものではなく、美的なものになるだろう。芸術のための芸術を実践しようとするのです。この言葉は馬鹿げた使いかたをされたり、よく失笑を買ったりします。しかしそれには深い意味がある。芸術には自立した調和があるということです。芸術に価値があるのは、教育的であるということでもなく（そういうこともあるが）、創造的であるということでもなく（そういうこともあるが）、誰もが楽しむからでもなく（誰もがということでもないだろう）、美と関わるからなのです。それが価値あるのは、秩序と関わっているからであり、この混乱した惑星のなかで、内的な調和を持つ独自の小世界を作り出すからなのです²⁹。

クラップム派が熱心であった社会に対する宗教的慈善行為は、もはや弱肉強食の資本主義経済のなかでは力を失った³⁰。そこでフォースターが打ちだすのは「芸術の必要性」である。確かに現代においても、この世界の混乱に対する治癒策として、芸術の効用を持ち出せば失笑を買うかもしれない。しかしそれはもちろん宗教にとってかわる万能薬のようなものとしてではない。フォースターは、「芸術のための芸術」というエッセイで、「社会というものは、人間精神のひとつの断片をあらわしているにすぎない。また別の断片は、芸術を通してしかあらわすことができない」と述べている³¹。つまりフォースターは、クラップム派についても英国国民の特性についてもそうであるが、その特徴を指摘しながら批判一辺倒になるのではなく、評価すべきところは評価し、常に足りない部分を補足しようと論を進めているのがわかる。この二者択一的姿勢ではなく、また対照的な性質を持つものを並べて単なる妥協や間をとるといった姿勢でもなく、その違いを持った複数の範疇を一步下がった位置から考察し、それを総合的に受け入れ、その上で秩序や調和を求めようとするのがフォースターの姿勢であった。

フォースターは、父方の家系について多くを語っているが、はるかに貧しく、従ってほとんど資料が残っていない母方の家系については多くを語ってはいない。しかしマリアンの伝記のなかで、ソートン家に嫁いだ母についての言及があり、そこで母方になるウィッチェロー家についての言及がある。それによると、「私の祖父は、絵描きだった。彼は創造的芸術家の繊細さと気質を持っていた。… 誰から聞いても、彼は感じの良い人だった—自己中心的ではなく思いやりがあり、感受性豊かでハンサムで陽気で、景色や建築物の美しさに敏感だった」という³²。また祖母は「愛らしい生き生きとした女性で、とても愉快で機知に富み、楽しいことが好きで寛大で、先のことをよく考えず、決して試練を天から受けたありがたいものだ、などとは考えなかった」とある³³。また母のリリーについては「陽気で魅力に満ちていた」とあり、ソートン家とは全く対照的である³⁴。

フォースターの批評においてストーンは、ジョン・スチュワート・ミルの「すべての英国人は、ベンサム派かコウルリッジ派かのどちらかである」という言葉を引用し、単純化を恐れずに言えば、フォースターの小説に登場する人物はこの2種類、すなわち功利主義者的かロマン派詩人的のどちらかである、と述べている³⁵。もちろん厳密にあてはめられるものではないが、主要登場人物について、その傾向が強く出ていることは間違いないだろう。処女作の『天使が踏むのも恐れるところ』に登場するリアは、明るく奔放で因習的な英国の家族から飛び出して、旅行先で年

下のイタリア人と子供を作ってしまう。また最後の小説『インドへの道』では、敬虔なクリスチャンで、やや気難しいが広い心の持ち主のムア夫人が登場するが、それぞれが母のリリーと、クラップム派に深いつながりを持つハナ・モアを連想させるのは偶然ではなからう。

この対照的なソーントン家とウィッチェロー家の特徴を見て、フォースターが最終的に後者をとるといった姿勢ではないことに注意しなければならない。もちろん小説のなかでは前者の狭量な部分が指摘され、後者が好意的にとられる印象がある。しかしどちらにおいても長所と短所が描かれ、その出会いによるそれぞれの成長がテーマになっているのである。冷たい功利主義者の商人と、芸術を愛するリベラルな女性の結婚を描いた小説『ハワーズ・エンド』で語られる言葉を思い出そう。「ただ散文と情熱を結びつけるのだ。そうすればどちらも高められ、人間の愛は一番の高みに達することだろう。もう断片のなかに生きてはならない。³⁶」

ストーンはフォースターが、上記の対照的なふたつの傾向のどちらにも強い傾倒を持っており、「芸術家でもあり同時にモラリストでもあり、詩人でもありながら散文家でもあり、小説家でもありながら社会批評家でもあった」と述べている³⁷。そしてフォースターにとっての芸術は、力を失った宗教の代わりになるもので、別の言い方をすれば、それは「ヒューマニズム」であると言っている³⁸。

ここでマンハイムの知識人論を参照したい。彼によれば、政治や世界観が対立する場合、ひとつの階級に属する党派的な見方は解決をもたらさない。そこで総合的な視野をもたらすものは、比較的階級色をもたない「社会的に浮動するインテリ層」だとする³⁹。限られた生活圏の世界観を受け入れた人間は、その中だけの価値観で判断をするが、社会的な絆から自由に浮動する知識人はそれを突き抜ける。

教養を身につけることによって、個人の身分上、階級上の束縛がまったく捨て去られることはない。しかし、この新しい結合の基盤の独自性は、次の点にある。つまり、教養を通じて、ある共通の土俵が作りだされ、抗争しあう諸勢力は、それを目安にして優劣を争うことができる。それは、いわば対位法形式のうちに諸要素の多声音が保持されるのに似ている⁴⁰。

このような知識人というものは、ひとつの信念、世界観を受け入れる党派的立場から離れるため、「どっちつかず」や「非行動的」といった否定的な批判を受けがちである。マンハイムはこのような浮動する知識層が進む道はふたつあるという。ひ

とつは対立する階級へ自ら加担する道であり、もうひとつは「自己の根底への自己省察の道、いかえれば、全体がもっている精神的関心の代理人として運命づけられている自分の使命をたずねることである。⁴¹」後者の道は、知識人のなかでも「ヒューマニスト」という人種のことになるだろう。つまりフォースターの選んだ生き方であった。

ソーントン家とウィッチェロー家という対照的な家柄の出自を経て、フォースターは大伯母マリアンのはからいによってケンブリッジ大学へ進学する。因習的で偽善的なソーントン家の財力によって、彼は進学も可能になり卒業後も職につかずに済んだ。彼は最晩年に書いたマリアンの伝記の終章でこう語っている。

私はマニー大伯母様があまり好きではなかった一年をとり過ぎていたし、私にくれたプレゼントの山は、私の小さな胸には届かなかった。私が（マリアンの死で）泣いたのは、簡単だったし私の母が望んでいただろうからで、人が死ぬということだったからだ。年月が過ぎ、私は大伯母様がもっと好きになった—彼女の良き人生をたどり語ろうとするいま、一番に愛している⁴²。

ストーンの図式を使えば、ベンサム派であるソーントン家のおかげで進学したフォースターは、ケンブリッジ大学、そしてその後深いつながりを持つブルームズベリー・グループなどでコウルリッジ派の洗礼を受けることになる。おそらくその成長期にクラップム派に対する距離を持つことになったのだろう。その考察は稿を改めることになるが、晩年になって作家の人生を歩んできた道のりを振り返り、知識人、そしてヒューマニストとしてのアイデンティティを再確認するにあたり、フォースターはクラップム派を再評価しようとしたのではないだろうか。

註

¹ E. M. Forster, “Henry Thornton” (1939) in *Two Cheers for Democracy*, (London: Edward Arnold, 1951), 185.

² “Henry Thornton”, 186.

³ Henry Thornton, *Family Prayers*, (London: Hatchard & Son, Piccadilly, 1842), 5.

⁴ *Family Prayers*, 116.

⁵ マックス・ヴェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、(岩波文庫, 1989年), 166.

⁶ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 95.

⁷ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 289.

-
- ⁸ *Family Prayers*, 18.
- ⁹ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 316.
- ¹⁰ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 353.
- ¹¹ *Family Prayers*, 134-5.
- ¹² William Hague, *William Wilberforce: The Life of the Great Anti-Slave Trade Campaigner*, (London: Harper Press, 2007), 222.
- ¹³ *William Wilberforce*, 354.
- ¹⁴ “Henry Thornton”, 187.
- ¹⁵ E. M. Forster, “Battersea Rise” (1935), in *Abinger Harvest and England’s Pleasant Land*, (London: Andre Dewtsch, 1996[1936]), 238-9.
- ¹⁶ “Henry Thornton”, 188.
- ¹⁷ E. M. Forster, *Marianne Thornton*, (London: Andre Dewtsch, 2000[1956]), 54.
- ¹⁸ E. M. Forster, “Mrs. Hannah More” (1926), in *Abinger Harvest*, 234.
- ¹⁹ “Mrs. Hannah More”, 234.
- ²⁰ *Marianne Thornton*, 224-5.
- ²¹ E. M. Forster, “Notes on the English Character”(1926), in *Abinger Harvest*, 3. ちなみにこの「英国民の特性」と「ハナ・モア」のふたつのエッセイは同年に書かれている。
- ²² “Notes on the English Character”, 4-5.
- ²³ “Notes on the English Character”, 10.
- ²⁴ “Notes on the English Character”, 9.
- ²⁵ *Marianne Thornton*, 45.
- ²⁶ “Henry Thornton”, 188.
- ²⁷ “Battersea Rise”, 239.
- ²⁸ E. M. Forster, “The Challenge of our Time” (1946), in *Two Cheers for Democracy*, 54-55.
- ²⁹ “The Challenge of our Time”, 57.
- ³⁰ フォースターは以下のように述べている。「この世界は、ヘンリー・ソーントンが望んだようには発展しなかった。彼には認識できた人間性にひそむ悪と、彼には認識できなかった商業主義にひそむ悪が、結合して世界を打ち壊し、彼が企てた宗教的救済策は、今日ではうわべだけの些細なものにすぎなくなったようだ。」“Henry Thornton”, 188-9.
- ³¹ E. M. Forster, “Art for Art’s Sake” (1949), in *Two Cheers for Democracy*, 92.
- ³² *Marianne Thornton*, 249.
- ³³ *Marianne Thornton*, 250.
- ³⁴ *Marianne Thornton*, 251.
- ³⁵ Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster*, (London: Oxford University Press, 1966), 5.
- ³⁶ E. M. Forster, *Howards End*, (London: Hodder & Stoughton, 1992 [1910]), 183-4. “Only connect . . .” という言葉は、この本の扉にも書かれている。
- ³⁷ *The Cave and the Mountain*, 8.
- ³⁸ *The Cave and the Mountain*, 19.
- ³⁹ カール・マンハイム、『イデオロギーとユートピア』高橋徹・徳永恂訳、中公クラシックス、(中央公論新社、2006年)、277.
- ⁴⁰ 『イデオロギーとユートピア』, 279.

⁴¹ 『イデオロギーとユートピア』, 282.

⁴² *Marianne Thornton*, 287.